



↑平成27年度から新たに「ニュースポーツ」に加わった「ユニカール」。氷上で行われるカーリングの陸上版です。「ユニバーサル・カーリング」(みんなのできるカーリング)を略して、「ユニカール」と呼ばれています。「滑らせるように」ストーンを投げ、相手のストーンを陣地から押し出していくスポーツです。

(1面から続く)

○川上 運動会や持久走大会などには、必ず生徒に個人目標を設定させたところ、「やればできる」という達成感を持ってくれたと思う。

しかし、それで終わりではなく、次の行動につなげるのが大切である。学年が上がれば勉強時間は増えるかもしれないが、運動の大切さも分かるようになり、体育の時間以外でも体を動かそうとする子どもたちが育っていったのではないかと。このことは勉強にも良い影響を与えていくものと思っている。

さまざまな出会いがある

《個々に合ったスポーツとの出会い》

○尾石 中学生になると、日本の素晴らしい文化である「部活動」という「場」がある。中学生になると「何かに取り組んでみようかな」という気持ちになり、ほぼ全員がどこかの部活動に入る。

競技的に強いスポーツを選ぶ子どももいれば、体を動かしながら友達と仲良くやっていきたいと思う子どももあり、ニーズに合った部活動を選んでいる。

大人にもそういう個々のニーズに合ったスポーツとの出会いがオリンピック・パラリンピックをきっかけにできたら良い。

《ニュースポーツとの出会い》

○川上 運動している子どもとしていない子どもがいるのは事実だが、多くの子どもたちは決して運動しなかったわけではないと思う。速くない、上手くない等の理由でためらいがあるのではないかと。

ある企業が、Olympic Movesという、運動する子どもにそってない子どもへ、二極化への対応を始めた。これは運動の得意・不得意、性別、年齢にかかわらず、同じ条件でみんなが楽しめるスポーツである。体を止めないで100cmをいかに遅く走るか、バンパー(バブルボール)の中に入ってサッカーをするとか。そういう仕掛けができれば、子どもたちの運動に対する苦手を意識を払拭できるかもしれない。費用があまりかからないニュースポーツもたくさんある。

《坂本 本市ではスポーツセンターで「ニュースポーツデー」と称し、みんなが楽しめる》

○坂本 本市ではスポーツセンターで「ニュースポーツデー」と称し、みんなが楽しめるソフトバレーボール、ユニカール(写真1)などがあり、スポーツ推進委員が指導している。スポーツへの第一歩として、より多くの方に参加してもらいたい。

《トップアスリートとの出会い》

○司会 東京都教育委員会では、トップアスリートが学校に来られる取り組みを行っている。西中学校のハンドボール部の選手からも、将来、トップアスリートが出るのでは。

○尾石 近い将来、東京大会には、本校の卒業生が出場してくれると思う。今年も本校の卒業生がナショナルチームのレギュラーとしてリオのオリンピックでの出場を狙ったが、残念ながら負けってしまった。しかし、卒業生の活躍を見ている、今の後輩たちのモチベーションはすごく上がっている。

○坂本 前回の東京オリンピック・パラリンピックが開催された当時の東久留米には中央大学柔道部の寮があり、オリンピックに出場した岡野功さんがいた。自分が聖火ランナーの練習で第二小学校のグラウンドを借りてトレーニングをしていた時に岡野さんに出会い、一緒に走っていた。それを見た当時の5、6年生の子どもたちが、われわれの後を一緒に走るといふ状況が2カ月くらい続いた。岡野さんは見事に中量級で金メダルを取った。

その金メダルを見せてもらった子ども一人が、「今度はお金が甲子園で優勝していい」と言ったことがすごく印象に残っている。その子どもも見事に実行し、甲子園優勝という金メダルを取ってきた。アスリートとの出会いはすごく大きいと感じた。

○川上 本校には、昨年、

ラグビーのオーストラリア代表で、オーストラリアのスーパースターだったニック・カミンズ選手が来てくれた。それは運が良かったからだと思っている。

《岡野さんは茨城県在住だが、この鼎談のことを話した時に、機会があれば東久留米市に来てくれると言ってくれている。》

○川上 ゴールドメダリストを地域の方の力で呼んでもらえるのは、ありがたい。

○尾石 「場」ももちろん重要だが、さらにプロフェッショナルな方に指導してもらえたいのが理想である。短時間でもトップアスリートやトップ指導者とかかわることが大きな効果を上げられると思う。

本校でも5月中旬にハンドボール選手の宮崎大輔さんをお招きできる予定で、当日、生徒たちはびっくりすると思う。大切な出会いの一つになるようにしてあげたい(写真2)。

《学校の授業全般にオリンピック・パラリンピックの精神を取り込まれている》

○川上 「オリンピック・パラリンピック教育」は、知・徳・体の調和のとれた人間の育成、全人教育である。体だけではなく、知や徳も当然絡んでくる。本校での目標の一つは、「国際社会で活躍する日本人の育成」である。オリンピック・パラリンピックは外国人や外国の文化との交流もある。

その金メダルを見せてもらった子ども一人が、「今度はお金が甲子園で優勝していい」と言ったことがすごく印象に残っている。その子どもも見事に実行し、甲子園優勝という金メダルを取ってきた。アスリートとの出会いはすごく大きいと感じた。

多様性への理解が大切であるが、その基本は自国の文化を理解することである。日本人としての自覚と誇りを持って育つべきだと考えている。異文化を理解し、大切にすることが大切である。体を動かすことはもとより、国際

社会で活躍する日本人の育成、多様性の理解が非常に大事な教育的要素である。

○司会 技術・家庭の分野では、授業にオリンピック・パラリンピックを意識づけたいのには難しいと思うが。○尾石 プレゼンテーションの仕方や、日本の文化レベルの高さに着目することが教育的につながると考えている。例えば、時計を作る技術など、日本人の職人のすごさ、賢さなどを改めて学ぶべき時代と思う。

○川上 「技術」は、まさにオリンピック・パラリンピックを支える重要なバックヤードである。選手の努力に日々進歩する科学技術の力が加わり、スポーツの歴史がつけられてきた。日本の高い技術がスポーツの歴史を変え、オリンピックやパラリンピックに大きな貢献をしている。そういうバックヤードは視点を交えれば幾らでもあるので、どの教科でも十分進めたいと思う。

○川上 学校の経営者としては、「学校教育を通しての人材育成」に尽きる。子どもたちの意識を変容させ、行動を変容させることだと思う。具体的には、①日本人としての自覚と誇りを持った、国際社会で活躍する日本人の育成、②人を元気にさせてくれるスポーツにかかわることにより、自信と勇気をもって将来に向かっていく人材の育成、③共生社会の実現に向

け、将来の国際社会や地域社会での活動に主体的、積極的に参加できる人材の育成などである。○尾石 今の小・中学生に日本の文化をきちんと学ばせて、日本の文化を海外にも広められるような、そういうかわりの持てる機会になったら良いと思う。

○司会 学校教育においては「人材育成」という明確なキーワードがある。生涯学習の面からはどうか。○坂本 この町で生まれて育った自分に、誇りと自信を持って育ってほしいことに尽きる。それには、スポーツが一つのきっかけになると思う。子どもの時に親しんだスポーツを学生時代、社会人になっても続けていけば、指導者として地域に帰ってくることもあるだろう。スポーツは横のつながりもたらしてくれる。

○尾石 教員の立場からすると、学校教育、生涯学習の相乗効果により、子どもたちが、日本人としての誇りを持ち、幸せを感じて生活できるような環境づくりのきっかけとなるものになってほしい。その時に、人とかかわりというか、みんなで一緒にやるのは楽しいという気持ちを持ちたせられるようなコミュニケーションづくりができたらいと、教員としてはすごく感じている。○川上 昔に比べると家族で一緒に観るテレビ番組がなくなったり、みんなで応援していたものがなくなってしまう。家庭という単位ですら共有するものが減ってきている。オリンピック・パラリンピックは今のわれわれが失いかけていた、「みんなで楽しむ」ということを提供してく

れると思う。○坂本 今は地域のクラブでは、ややもすると試合が多過ぎて、家族とのコミュニケーションが取れない状況がある。家族でどこかに行こうとしても、子どもの試合があるから無理ということだと寂しい。地域でもスポーツ熱が高まっていくと思うが、家族を大事にする中で、地域のスポーツが盛んになっていけば良い。○尾石 中学校の教員になって部活動の指導者となったが、「部活動」は日本一つの大きな文化で、それは諸外国にはほとんどない。体調問題や指導者育成の問題はあるが、中学校の場合は、みんなが正しく教育されるという、日本文化の底にある日本人の意識づくりの重要な役割を担ってきた。その教育をもっと活性化すること、そこだけにこだわらずに地域との共生を図り、正しいスポーツのあり方を互いに学び合うことができれば、これからの子どもたちがきちんとしたものを選んで生きていくのではないかと。